

玉川たまがわ〔一名井堤川いであともいふ、六玉川むつのたまがはの其一いちなり〕水上みなかみは井堤里いであの東二里とうにりばかり、和東わつかといふ所より流れて、井手の南

を過す、玉水里たまみづのさとを西へながれ、木津川きづがわに落入おちこなり。左大臣さだいじん山吹を愛し給ひて、玉川たまがはの汀つらに隙なく植させ給ひける。〔今其跡あとを御溝裏みそのうらといふ〕花の輪わは小土器こつちぎの大きにて、幾重いくじゆうともなく重りて、花の盛さかには黄金おうごんの堤つとなどをつきわたしたらんやうにて、他所たつとにはすぐれて侍りしなり。〔无名抄意取〕

古 今 山吹はあやなくさきそ花みんとうゑけん君がこよひこなくや

〔延五抄曰、此歌は諸兄もろえの大臣だいじんの歌なり。山城やましろの井手いであの寺光明くわうみやうし寺を建立して、山水さんすいに款冬くわんとうをうゑたり。其時たかむき高向たかむきの迦留かろ大臣だいじん此山吹こやまぶを来て見んと約束して不来こ時に読よみ。今の井堤いであの玉水たまみづ其旧跡きうせきなり。云々〕

同 かはづなくるでの山吹やまぶちりにけり花はなのさかりにあはまし物を

〔この歌は、ある人のいはく、たちばなのきよともがうたなり、清友きよともは橋はし諸兄もろえ公こうの男おとこなり〕

〔色葉集曰、井堤いであの山吹やまぶとは、ある説せつに、橋はし諸兄もろえ井堤寺いであを造りて、金堂きんどう四面しめんの回廊かいりやうのめぐりに山吹やまぶをうゑて、廊りやうのうちうちに水を漙ぬて花はなをさかせ、水みづにうつして見るやうにかまへたり。供養くやうの日思ひはざるに讒言せんげんを帯おて身みまかりにければ、水みづの花はなをうつしてみる事もなくやみけるをよめるとぞ。又また維清いせい抄曰、諸兄もろえ公こうの宣のたまふは、我が一期いちきの後のちにわれを思おもひ出いさば、此玉水ここのたまみづへ来て見よ、影かげをうつして見せんとぞ〕

新 古 駒こまとめて猶水なほみづかはん山吹やまぶの花はなの露つゆそふ井手いであの玉川たまがは

俊 成

続 古 玉川のきしの山吹影見えて色なる波に蛙なくなり

後 鳥羽院

堀 川 かはづ鳴井手の小川の水清み底にぞうつる岸の山吹

師 頼

岩橋いははし〔むかし玉川にかゝりたる橋をいふ〕

家 集 かよひうし井手の岩橋いははしたどるまで所もさらずさける山吹

顕 季